

金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』翻刻（二）

—京都市歴史資料館蔵『苔の衣』本文対照—

関本真乃

本稿は、前号（『京都大学國文學論叢』第三十九号）所載の拙稿（『金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』翻刻（一）——京都市歴史資料館蔵『苔の衣』本文対照——』の続きである。前号が上巻、今号が中巻の翻刻である。内容的には完本の巻三、苔衣大将が出家遁世する巻に相当する。

〈凡例〉

- 一、字体は通行のものに統一した。
- 一、本文丁数については、丁のはじめに（二オ）のように示し、改行は「」で示した。
- 一、見せ消ちは、朱の場合 あい、墨の場合 あい、で示した。朱字書き入れは「」、墨字書き入れはゴシック体、紙片の貼付であることは「」で表した。ただし、貼付紙片に見せ消ちを意味する記号が書き込まれている場合、「ヒ」のように示した。なお貼付られていない大きな紙片の書き入れについては、稿末にまとめて示した。
- 一、判読不能箇所は「■」で表した。
- 一、京都市歴史資料館蔵本との校異箇所は□で囲んで示した。

一、濁点を表さない「ㇿ」をはじめ、「○」「・」「□」「（）」「等」の記号についてはできるだけ忠実に「ㇿ」「○」「（）」「等」で示した。

一、貼付紙片のみがある場合は あいう のように示した。

一、貼付紙片が訂正を示していると思われる場合、 あい のように示した。

一、貼付紙片のうち、親本の字を真似て書き、本文上部に貼付たものは省略した。

（二オ） ゆく ^{行く} なくとりたか ^か ^へ ちれ給へりし「」そち ^前 のみや
のうへは「」うきには人のた ^た ^さ るもの「なれば「」いまはや
うくよつきて「」中納言の物 ^物 などのたまふにも「」御返事
につかはしくした「」まひても「」おりく ^を に ^に けていと心うく
そおほししらるゝ「」この事をはしめより「」こ大「夫かし
くなん有しとかたりきこゆるに「」心うかりける母うへの
御心かな「」さるはらくる「」なるこゝろかまへのなからまし
は「」かゝること「」やはいてくへきと「」うとましくおほさ
れ「（二ウ）は「」ことにもなともきこえかはしのたまは「」す
「」よのつねめかしからず「」少納言のめのか「」もとへ「」

かくしたまひてし女君のを（さ）給ふ」まゝに「いとを（さ）しけに
みえたまふを」「その」ほどむかへきこえて「中納言など
には「したしきゆかりなどいひなしつゝ」「つれ／＼のなく
さめにしたまふ」とのゝ大なごん殿のうへ」「この」秋つか
たよりわづらひたまへは」「又御いのりな」とあまとおほしめ
したり「父おとゝなどは」「あまりにわかき御ほどに」「
かくしけくもの」(二才)したまふを」「いとあやうくおそ
ろしくおほす。ひんかしのうへも」「さこそ心ふかき事など」
おほしかまへしかと「かきりなかりし御さま」もさすかにこ
ひしくて「おとゝにきこえ」つゝ「時／＼まいりて見た
てまつりたまふ」に「御てうとよりはしめ」「此世のことく
もみえぬつくりありさまに」「いつきすへられ」たまふる女
君の御さまなど見たまふに「中／＼心やましくおほさるゝそ
うたてき」「としもはかなく行かへりて」「うへのこさん」
(二ウ)ちかくなりければ「たゝ時のほともおほつ」かなか
て「おさ／＼みん内へまいり給ふ事」も「此ほどゝ成て
はかたきを」「うちな「○」には「いりぬるいそのと」「
うらみさせたまふそおかしき」「誰もかゝれば」「○」めて
たき御さいは（さ）なりやといひさ（さ）はく。あつげにやこのたひは
「かゝねてよりくるしくし給ふを」「いとわひしくおほすへ
し。御いのりの有様」「さき」にかはることなし「五月朔日
比に（さ）の御けしきにわづらひ給へと」「いたくるしけ」
(三才)にて「その日もくれぬ」「なにとなき御ものゝけ
とも」「こゑ／＼のゝしれは」「いとゝ心あはたゝしく」「
おそろしくあやうく」「誰／＼もおほしあきれたり」「お
もひよらさりしかきね」わたりまでも情ある御こゝろにもわす
れ」すとはぬほとおとろかしたまひしかと「このうへわたり
給て後にこよなくおもひ」わすれたまへる所／＼にはいとつら

しと「おもひわたるかやうなる折ふしには」「まつさ」しいつ
るそうとましきからうしてあかつ(三ウ)きかたにそこな
りぬるこのたひはかく」ふたはよりひかりつきたまふへきにや
と見「ゆる女君にてそおはするこれは今すこし」いたはしさそ
ひたまへればまたしきに心」ことにおもひかしつきたまふこも
ちのきみは「なこりもゆゝしけに見えたまへはそうと」もなと
もみなとゝめて給ひて猶／＼御いのりせさせ給ふ御うふやの
きしきもはし」めにおなし事なり女房などもさまこと」なるを
はえりいたしつゝ姫君のかたへた(四才)てまつりたまふ日
ころふるまゝには御いのりのしるしにやうへの御心もよろし
く成」たまひければそうともにもみないたまた」まはすさても
やるかたなかりし物おもひ」を引かへておもふ事なくうちかた
らひて」あかしくらし給ふ御心のうちはなを（さ）つき」せずおき
ところなくおほされけりとし」月ゆきかはりてとくうも十一
にならせ」たまへはこの春のほとに御くゑんふく有へ」しとの
ゝしるに御門などもおほしいそき(四ウ)つゝやかて二宮の
御はかまきもおなし」なりその日になりぬれはいとのさ
はかし」きまでみこたちかんたちめ殿上人まい」りこみつゝさ
ふらひ給ふ春宮はまたし」きにものはつかしけにうるはしき御
さま」そあらまてしたまふる二宮は又さまこ」とにあひきやう
つきていまめかしくみま」ほしき御さまなりふくらかなる御か
ほと」御くしのゆゑ／＼として御かたのわたり」にかゝりた
まへる御すかたいふかたなくう(五才)つくしうみえたま
ふ御おちの大納言にそ」よくかよひたまへるさしならひたまへ
る」めてたさをみてまつるにも宮の御さ」いはひいまとし
ほまさるこゝちするまこ」とや左のおとゝの御いみもはてにし
かは」左大将内大臣にあかりたまひしそかし(二)を」り右の
おとゝのあにの右大将にくわんはく殿」の大納言殿なり給ひに

きとうくうの御く」えんふくはてぬれは内のおとゝのかしつき」つゝ大なこんに心かけたまひし姫君その」(五ウ)夜まゐりたまひぬせんゑう殿に御つぽねし」つらひてむかしおほへたまひつるあたりな」れはゆへなからすゝろにくけなる女君」もことのほかにおとなひたまひけるに何」事もうしろめたからすおほしをきてつ」つさふらひ給ふとのゝ大納言殿のひめきみ」御としそひたまふにしたかひては母うへに」たかふ事なくおひいてたまへはいかてかお」ろかにおはせんわか君は六になりたまふ」このふゆそはかまたまふへきとしの」(六オ)ほとよりもこよなくおとなひつゝうつくし」く見えたまふたちかへりたる夏よりれい」せんあんのなにとなくわつらはせたまふを」あつけにやなとおほすほとにたゝいつと」なくのみくるしくせさせたまひてよはけ」にならせ給ひてわか御身もすえになりぬる心地せさせたまふいかならんにつけて」もおほしめせは冬になりて御くしお」ろしたまふときこゆるにそみかともおほし」おとろきて行幸ある大宮もおなしさま」(六ウ)にそむかせたまふことにとしころわく」かたなくさふらひ給ひつるに御としの」ほとなどはこよなけはいかてかたちかく」れたまふへき御心なとかふ程なる御」なやみにてもなければよろつなに事も」内のうへにきこえをき給ふ中にはかな」くなり給ひにしこうきてんの御はらの」姫みやはいとかなしきものにしたまひて」此としころ大宮の御子になしきこえたま」ひてたゝ御かたはらにおほしたてまつり」(七オ)たまひつる御事をいと心くるしけに聞え」給ひつゝおほしのかひたまひはかゝしきう」しろみなどともなき女の身はいと心ほそき」ものなれはとのゝ大将にゆるしてうしろ見」につけて心やすくなをかまほしくおもひ」侍るおほかたのよさまにもあかね所なき人」なりねひとゝのふにしたかひていといみし」くのみ見えたまふさやう

にみんもくちおほし」くあらすなんされとも日をへてみたり心地」くるしくなり侍れはそのほいのいかならん」(七ウ)そやといとくちおほしく侍るなどのたまへは」宮なときこゆる人たにまたものしたまは」ねはめつらしきもいかてかをろかに侍るへき」なからへもふるまひにおこた」り侍事もやとおもひたまへるに右大将わ」たくしの御うしろ見にてつかふまつらん」事いとよくこそさふらはめと申させ給ふを」うれしとおほす目比御まうけありつるさ」かのゝあんな多もんにうたうのみやもうつら」(八オ)せたまふ今はこれにてほとけくやうな」とし給ふへければ姫きみはやかてうちへ」むかへきこえ給ふ今はのおりまでもそひた」てまつらぬ事をいとなしきおほし入たる」こととはりなれとさのみいひて有へき事なら」ねはあくる日うちへわたしきこえたまふ」むかしの御あとおほしやりてこうきてんにさふらひ給ふうへはつねにわたり給ひ」つゝなくさめきこえたまふいとほ」うたけ」にこめかましくてひとへにあへかに心く」(八ウ)るしきさまに見えたまふさかのゝ院には」御ちかひのしるしにやことのほかに目を」へてよろしくならせたまへはいとうれし」くてわくかたなくをこなひ給ふも姫みや」の御事すこしわすれかたくなるしう」おほされけるうちにはとのゝまゐり給へるにこのことをしのひて御きそく有に」又いかにそやとわつらはしくくるしく」おほさるれといかてかさほとと事をいなど」申給ふへきいとかたしけなきよしにのみ」(九オ)かしこまりていたまひて大将とのに」かゝる事なんとほめかしたまふにいか」てかよしとおほされん我々おもふ事かな」ひてすこしつるに又いかなるなけき」をすへきにかとそのことゝなくてあかし」くらししほりたまふさやうにやむ事なき」御あたりにおほしたまへんはものうくおほえぬ」へかり

しにましてひるまのほとたにおほ「つかなき心いられも我ながらも物くるはし」きをさやうにまいりそめなんはわか身も」(九ウ)心にえまかすましけにこそなを人の御た」めふひんなる心つかひせんをはしもよわと」のうへもよしとおもひたまはしなと時の「まにおもひつゝけたまふにいとむつかし」くむねいたく御いらへもせられたまはぬ」をことばりにいみしき宮なりともまことに「あのありさまにえまきり給はしとうへは」心くるしうみき」たまふいかにさふらふにか」よとゝもにはみたり心地よからす侍りて」世にもなからふましきやうにのみおもふた」(二〇才)まへれさふらへはさやうの御うしろ見に」まいりそめ侍て中／＼の人の心くるしき」ことにもや成さふらはんなどことすくなくにてたち給^めかへりて御かたをみたまへはしろき御そなよしかにてあまたかさなりたる」をなつかしくきなしたまふてうちふし給」ひてそはのかたへうちやられたる御くし」れ〇の今はしめてみつけたらんこゝちして」めつらしうおほさるやをらかたはらにそひ」ぬ給へるにうちおとろきて見あげ給へる」(二〇ウ)御かほのほひなとすへてこのきんたちのはゝとも見えすらうたけにうつくしきをみ」給ふにそのことゝなくなみたもこほれてか」けても此ありさまにほひなきやうに「見えんこそあきなく心うかるへけれどま」たしきに世の中もさましくおほさるやか」ておなしさまによりふし給ひていひの「ちとせをかねてかたらひきこえ給ふうち」にはおとゝにもらしそめたまひし後は」つに心もとなけに御きそくあれはかはかり」(二一才)かたしけなきをしらすかほにてすこさん」もむねにひんなかりぬへしさとてさは」かりいともものうくおもひたる事なれはい」かにせましととのその中にてくるしく」おもひ給ける年たちかへりぬるにはる」のはしめよりあさましく世の中さはかし」くて道おほちにもはかなくうたてあ

るも」のなとあまたみゆるに右のおとゝきたま」へはおひふしをいとおほしきはく大将とのゝ」わか君は今すこし^おとなしくて見た」(二一ウ)てまつらんとおほすこのはるくえんふくせ」させたまつりたまひて少将と^{はきこ}せ」ゆるひめきみも五になりたまへはふゆ」つかたそはかまき」〇^{せき}せたまつり給ふへき」かくて右のおとゝの御心地日にそへたま」さり給ひつゝ六月はかりにそむけにたの」もしけなく見えたまへは大将とのゝ御」かたなどおほしなげくさまおろかならん」やはやかてわたり給ひてこのほとはこれ」におはするをいとうれしとおほしけり」(二二才)とかむるひまに女君はおさなくものし」たまひしよりさまことにおもひきこえ侍し」かひ／＼しくかくおもふさまにあかぬ事な」くて見えさせたまふいと心やすくかきりあらんみちもやすらかに」ぬへく侍り少将」殿ひめきみの御ゆくすゑを今しはし見」たてまつらす成ぬるなむほ^おなく侍れ」とそれは余の事に侍るなときこえたまふ」大将殿にも御心さしのほとあさからす」見え侍るはことあたらしく申侍へきには」(二二ウ)さふらはねとたのもしき人なき有様を」いと心くるしく侍るなとかへす」申なけ」きつゝきこえをきたまふをことばりにいと」をしくみたまふ御いのりともかた／＼に」いとたのもしくみゆれとかひもなくて六」月廿日あまりに出家したまひてつるに」うせたまひぬるをたれも／＼いとあはれ」にかなしうおほしたり御としのほとも」かきりあるへきほにもあらずいまたい」とわかくおほしつればあはれも一しほ」(二三才)そふこゝちす中にも大将殿の御かたなど」はおなしおやこといひなからいふかひなかり」しよりいかとのおんななどのやうにこまか」におもひはこくみ給ひし御こゝろさしな」とおほしいつるにいかてかをろかならんい」まそかひあるへきならねはやかてくしき」こえてとのへ帰り給ふをむなしきあとを」今すこ

し見まほしくおほしける中納言「おとゝのさいしやう中將など
そよろつにつ」かふまつりたまふ日比なにとなくものさは「(一
三ウ)かしきやうなりつるにこよなくしつまり」たるいとをし
大將殿にはいたくなけきたるを見たまへはいとゝあたりもさ
らすそ」ひみ給ふてさめきこえ給ふたけきことゝ「は御ほ
うしなとをそよにすくれてためし」にも成ぬはかりせさせたま
ふひむかし」うへもさまかへつゝおこひ給ふ大納言の「
御もとへもむかしよりをろかならずおもひ」かはしたまへる御
なかにてまめやかに「あさからす大將殿よりもとふらひたまふ」
(一四才)やう／＼四十九日にもなりぬればひさ／＼「ゆきわ
かれたまふいづれとなくかたみに」なこりしつゝいとあは
れにかなし思ふ」ほとよりもみしかゝりける御いのちの程」
おほしつゝくるにもいかにかくおもふ人ゝ」にとくをくれきこ
ゆらんと大將殿のうへ」はつきせすあはれにおほさる月日はは
か」なくすきて冬にもなりぬればひめきみの御はかまき人し
れすおほしそき」たり御こしは中宮にとおほせはおほとの「
(一四ウ)にてそきせたまつり給へき上の御はゝ」かりのほ
とにてことさらましほひたまふ」ましきそほいなければともかは
かりはあな」きよは今はしほし心もとなくおほさるゝ」なりけ
りそのよになりぬれはいとつゝしけにしすへられたまへる
ひめ君のうつくしきをさきのさいくはゝきみも此」程に
てきたまひしそかしとおほし出で」いとあはれにおほえさせ
たまふ中宮は有」難までうつくしきをことほりそかし誰」(一
五才)にたてかはと見たてまつらせたまふことゝ」もはてぬ
れは人／＼の緑なとれいの様」なりすこしふけてそ母うへみや
にたい」めんしたまふかやうの御いそきともはてゝ」としもか
へりぬれはこうきてんに御門わ」たせたまへはさうのことひ
きすさめ給ひ」て御さくらにこうはいのほそかなと」なよ

らかにきなし給へる御さまのらう」たけにこめかうて御くし
もすこし」いろにてすくなやうにもし給へはかゝ」(一五ウ)
りなといとあてやかにみえたまへはいま」たしもおとろへたま
はぬほとにおなし」うはこの大將の事とくあらまほしくお」ほ
しつゝくるにいとけすけなる事」とは御らみすれともさ
のみ「○」いかてはいかす」あるへき又このありさまとても見
そ」めきこえてさしもかひなくなとはよに」きこえしさもあら
は冬比たゝをしてゆ」つりてんさかのめんなどもかへす／＼の
た」まひしことなりとおほし成ぬかつは右」(一六才)のおと
ゝなどのいとひんなきさまにうけ」ひきたてまつらてさうな
くおもひゆつり」たるもめさましうおほしめしきたる」す
ゝなるへしとのゝまいりたまへるにも」かくなんおもふ
とおほせらるればかへす／＼」かしこまるよしを申たまふ大將
はこの事」をきゝ給ふにいとあちきなくこゝろうく」おほされ
てかすならぬ身ひとつをたにも」我心にまかせ「○」ぬとよと世
もすさましう」むつかしうきこえあはせつゝすくし給へは」(一
六ウ)ましてこのことをへたであるへきならねは」かゝること
なんと女君にほのめかし給ふに」有ましき事とおほさねとさ
はかりおとゝ」のうしろめたけにいひをき給ひしはこと」はり
なりけりいつしかかくて人わらはれに」成ぬへき身にこそかや
うのことをきゝ給へ」ましかはいかにほゐなくおさまし物思ふ」
ましくてやさきたち給ひけんとかた」／＼いとあはれにおほ
してなみたくまれ」ぬるをこの事をあさましうおもふとや」(一
七才)おほさんとくるしくてまきらかし給ふ」この御氣しきを
見たまふにいみしからん」かくや姫成ともなにゝかはせんとそ
おほさ」るゝうへは此ことをきゝたまひてのちは」何事もいつ
までくさとのみかりそめに」おもひ給ひつゝやまひにもなりぬ
れは」こうきてんのみやの御事やう／＼世の中」にもりきこえ

てさはかりいみしき物にし「たまふうへも御門の御むすめにはなら」ひきこえたまはしとうちの御きそくの「(一七ウ) さはかりめてたかりしをいなひたてまつり」給ひてこの大将にゆつりたまひしと「父おとゝのひかれたまふまゝにいつしかゝくなりゆくへきやかつはそのひくなさを」みかとの御心にもおほしつめたりける「にや大将殿の御ありさまけにたうていの」御むこにてもありぬへきなと世人やすか「らすいひなやむそきゝにくきとのほかく」きゝいれたてまつらぬさましてすこし「たまふこそいと心なきやうなれ今はいか」(一八才) にものかれたまふへきことならずそのほと「とおほして御用意ありければいとかたし」けなき事なり御文などを猶々たて「まつりたまへかしとたひ」のたまへはいと「くるしくおほへたまふにまめやかにうち」の御きそくなどもまことしけなれはいか「にせましとなつかしくおほさるへしうへは」とのもいてたまへるひるつかたのとやかに「うちふして世の中のいふなることおほし」つゝくるにもなを「いと物はかなき」(一八ウ) 身こそ心うかりけれつゝに人わらはれに「成はてぬへき身にこそはか／＼しきうし」ろみなともなくてやむことなきましらい「もおこかましき事もやおもへはとのた」まひてうちまいりこともつゝにとまりにし「にこれさへかくいつしかかはりゆくことを」いかになき御かけにもおほすらんこうへ「なとにたにとくたちをくれてよるかた」なきありさまにてすこさんこそまこと「にあはれなるへけれ大将の御こゝろさし」(一九才) なに事につけてもありかたくおほしし「られたまへはかきりなき御あたりにまいり」そめたまひてとかくわけ給はんこゝろも「その御ためあしかりぬへし這御もてな」しかはらすはわか御身にもいかにかた／＼くるしうおほさん我こゝろにもかくひま「なくなはし給へるに今さらにこよなく」つれ／＼ならんなかめくらし

かたくまこと「に心ほす^(二〇才)かりぬへしなととにかくに数なら」ぬ御身のほとおほししられてなみたも「(一九ウ) こほれぬるに姫君のおはしてなに心なく御そひきあけなとしてたはふれ」給ふかいとちいさき御ほとにおかしきこう「ちきにすそひきたまへる御すかたいと」おかしけなれはあはれにみたまひて御前なるかみに「はかなくてかきほあれぬとなてしこに」露のあはれはかけさらめやは又「千代までとちきりしなかのめにちかく」おほろのしみつたえやはてなんなと筆「(二〇才) まかせおな か しうへにかきすさひたまふ」ほとに殿いりたまへはおましのしたにな「にとなくをしれ給ふをいとよく見つけ」てとりてみたまへはうへはいとはつかし「くおほして御かほうちあかめて引そは」めたまふかなをあかさうつくしきにも有「かたかりける御さまかな目にそへてわか」くらうたけにのみなりまさり給ひつゝ「きのふにけふはひかりそふ心ちし給ふ」いとあさましきほとなるはかなき筆の「(二〇ウ) すさみにもかくおもはれたてまつるよ」と心ならぬことゝいひながら御身もうと「ましようおほえたまへはおほろのしみつと」あるかたはらに「よしや見よおなし此世にすみなから」おほろのしみつたえやはつるとかきつけ「てみせきこえつゝ」此世のほかまでち「きりたまふあまりにはたゝすの神まで」ひきかけていみしうちかひ給ふを女君は「中／＼いとくるしうそおほさるゝ右の御」(二一才) はてもちかくなりければたゝいかさまに「してもあのよのかきりをましきこえむ」といとなみ給にこうへなともうちしきりつゝゆめに見えたまひてなにとなく物こゝろほそくおほさるれはいつかたさまに「もみしかくのみ見え給へは我もさやうな」るへきにやとあはれにおほされてとし比「御くわんにかきをきたまひしこんてい」のほく／＼んきやう六ふをおなしくはこの「はてにとおほしいてゝこうへなと

もいま(二二ウ)たわかくて物をのみおほしなけきつゝはか」
なくなり給ひにたれはいかにつみふかく」ものしたまふらんを
いかてかるめきこへんと」御心にはるゝまなくおほせとなこと
なくいまめかしき御いとなみにまきれつゝすく」るも本あな
くてふた所の御れうとおほ」したり六月はかりにはあつけに
るしき」やうにさへおほえたまへとおとこきみに」かくときこ
えはまたなにやかやとおほし」さはかんも心くるしくてなにと
なくすく(二二才)したまふ御はてちかくなりてにしのめん」
にこうへのつくりをき給へりし御たう」あれはそれにてとおほ
してうつろひた」まふ御はての日をけちくわんとあてゝ八」か
うお(三才)なひ給ふよにきこえあるそうとも」日々にかへつ
ゝもんたりもまことにせ」そのみのりもかくやときこゆるに
また」ことほりにいひなしたる御経のよと」さもたゝいまの
うちに等覺のくもへのほ」り給ひぬらんとそきこゆるかく御こ
ゝる(二二ウ)にいておほしたる事なれはかんたち」めて
んしやう人なとのこるはすくなくま」いりつゝおほかたのき
しきもいとめてたし」日もほとなくすきゆくこゝちしてはて
の日にもなりぬれは心ほそくかなしくおほさるゝに中宮より」
かなしきはつきせしものをたらちをの」かたみのころもけ
ふはぬくと」もとのたま」へるかいとゝかなしき事はけふそ
つきせ」ぬとそかきてまつりたまへるか(二三才)てこと
ゝもはてぬれはかへりたまふへしと」きこゆれとおもかけこひ
しくたちなれ」たまひしあとは今しはしもかくてすまゝ」ほし
うおほさるれば五六日はかりおこな」ひなとしておほするに
な(四才)いと心ほそく」おほされてはかなき木草水のなかれ」にもめ
とまり給つゝとはかりなめいらるゝ」をわか御心にもけにい
かゝなるへきにかと」あやしうおほさるさてのみすくし給ふ」
へきならねはかへりたまはんとて御くるま(二三ウ)なとよ

する程みなみのつまより見たせ」はつりとはいけのうへなど
このとしころ」御覽せつるほとにことのほかにこくらく」しけ
りにけり月かけくまなければみわ」たされたるもなこりをし
くてとはかり」やすらひたまふ」あまのとをてそやられ
ぬたちかへり」またも見るへきやとにしあらねはてか」へり
みかちなからのり給ぬ三条殿へおはし」ても心ほそさつきせ
ぬきんたちを見(二四才)たまふにもうちなかれたまふお
り」も有を殿はいとこゝろえすよのつね」ならぬけしきをい
かにおほさるゝにか(二五才)このひめみやの御ことなとさやうにも
あらはいまさるゝに人わらはれにらん」ことこそなとおほさる
ゝにやと様」に」おほせとさやうにも見えうへはたゝ」な
にとなく心ほそうおほされしはかり」にてもなくて日にそへて
はよとゝもに」心くるしきやうにさへおほえたまへは(二四
ウ)ふしかにちなやましけなる御もてなし」をれいの御心地に
やとたれもおほした」れと」おほはすることなとおほしやうに」
ものし給ふをいかなる御こゝろにかと」おほしさはきつゝ御い
のりともはしめ」たまへはすこしよろしきさまに見え」給へと
またさはやかにはなりはて給は」すたゝうちふしかににてはか
なき御」てならひにもあはれにこゝろほそき事」をのみかきす
さひ給へはとのみ給ふ(二五才)に御むねつふれていとかな
なしうおほえ給へ」はつゆたちさり給ふ事なくておなし」さま
にそひふしつゝかたみにさきたち給」はんことをかなしとおほ
したりたゝおなし」さまにそおとろゝしきことなとはさすか」
に見え給はず秋にもなりぬれは八月十五」夜にてん上の御あそ
ひ有ていたくうち」よりめしあれば大將まいり給ひぬあさ」ま
しうまひりたまふことのかたきをそ御」かともいとほぬなしと
おほしたるに(二五ウ)こよひは待よろこはせ給ふて月のひ」
かりよりもめつらしうおほしたるそいと」かたしけなきあかつ

きかたになりぬれば「人^{ひと}はまかて給ふに大将の御ありさまつき」
せすねひととのひたまふまゝにめてたき」をうへもとく御かた
人にみまほしくおほ」されたまふまことにおほろけの人なら
ひ^ひ」にくけなんめるをこ右のおとゝのさうなく」ゆつりたり
しかかひくしくわくかたな」けなるはいかはかりなるにかた
おりふし」(二六才)につけてなをおほしすてられす^{おほし}しうを
しう」ゆかしうおほしめさる月かたむくほと」になりて大将い
てたまはんとてこうき」てんのかたとをりたまふにしやうのこ
との」をとかすかにきこえたるをやすらひつゝ」すきやりたま
はねはいとなまめかしうな」つかしけなるをたればかりならん
とさす」かにおほつかなくてほそとのゝとくちの」あきたるよ
りやをら入たまへといかにと」あやむる人もなければうれしく
てた」(二六ウ)てわたされたるさちやうにまきれつゝ」いり
たまへはこのねちかくきこえて火」のひかりなとみゆるをわ
りなくひまよ」りのそきたまへは御まへに四五人はかり」さふ
らひてみしかきとうたいに火ともし」てゑなとみるへしみやは
しやう^{さう}のこと」かきならしたまひつゝさちやうのまへに」より
ふしたまひたりふたあひの御ひとへ」とへにくちはのほそなか
きさせたまひ」たり御くしのかゝりなときら／＼とうつくし」
(二七才)けなり御かほあてやかにこめかしうてち」いさやか
なるほとなどはしゆ^しやく院の」一ほんのみやにそかよひ給へ
るよきといは」るゝあたりもなへてはかやうにこそとは打」う
めかれてたち給ふそわれなからいみし」きひしりの御こゝろな
るとすこしひとり」ゑみせられ給ふあからさまにも此あたりに」
たちやすらひては人に見えしとおほせは」やかていてたまひ^ひぬ
うちにはこうきてん」の御こと霜月になればさま／＼^あ覚しいそ
(二七ウ)きたり大将はいかなるにかいとゝありし」かひまみ
の後はものうき^あまさりてまめや」かにあちきなくおほすにうへ

の御有さま」見たまふにこのころの御やまひにすこし」おもや
せ給ふて御くしはいとさかりにて」御そのすそにおほくあまり
つゝまよひ」たるすちもなく／＼てけさやかにすそ」つきなと
いへはおろかなるとし月にそ」へてはわかほ^うう」たけにお
はすずちのなけきをすへきにやとまたし」きに心うくおほすに
いとくるしけにのみ」したまへはつゆまたわくる御心もなく
ほとちかけれと大殿にもまいり給ふ事まれ」なるに我ながら
いかゝとおほゆるなり月に」成てこの御こゝ今すこしまさ
り給ふ」てをきみ給ふ事もありかたければ我御」心にもいとあ
はれとおほされてことにな」からふへくもなくおほえたまふま
ゝには」きんたちを御かたはらさらずまとはし」(二八ウ)つ
ゝみたてまつり給ふむかしより秋の」あはれは本草につけても
ことに心に」しみてならひ給ひたれば年ころなで」つくろひた
まへるつほ^ほせんさいなと色」／＼なるをけうそくにをしにかゝり
つゝな」かめ出給ふにもこの秋はかりにかきりつゝるにやとい
ともの心ほそくあはれにおほさるれば」いつまでかよそに
てもみんとすれは」きゝをあらそふはきのした露とてをし」
(二九才)のこひ給ふをとのちか／＼くおほしければいと」よく
きゝたまひてけにいかにおほすへき」にかかくのみおほしたる
いとこゝろまとひ」せられたまふ」のこり^りてなけかんよ
りはもろともに」あさちかはらの露ときえなるときこえたま」
ひつゝいとかなしう覚えてかきりあらん」みちもおくれ^ききた
ゝんことはなを心うしとおほしたるをうへは心くるしうみた」
まひてれいさまなることをたにかくお」(二九ウ)ほしみたれ
たるにましかきりありて」ふりすてきこえんのちけにいかは
かり」おほしなげかんとはかなきたはふれ事に」つけてもめさ
ましうおもはすなる御心の」ほとなどをみせ給はすなりぬるこ

とは「けにこのよのほかにもありかたくやあらん」とむかし
まのことおほしつゝけて打かた「らひつゝやかてはしちかくよ
りふし給ひ」たるにもなとつゆ見いれたまはす日比」のつも
れはにやてあたりなともことのほか「(三〇才)にあへかにな
りたまひたるしらうた」く心くるしきさまはいよ「まさり
てに」かくにかきりなくのみおほさるゝにもまつ「いま／＼
しきあらましことおほしつゝけら」れてかた時もうつし心にて
ありなんやと」なみたもこほれたまひぬあけるゝにつけ「て
もけふや／＼とのみおほされなから秋も」くれぬるによはりゆ
くむしのこゑ／＼もい「つれかさきにとしての山路の我しるへ」
の心ちし給ふいたくくるしうのみなり「(三〇ウ)まさり給へ
はいつかたにつけてもおほし」をく事いかてかななるへき中
にも姫きみ「はいまたいとけなき程を見すて給はん」ことそかき
りなくかなしうおほさるゝ殿の「御こゝろさしまことにありか
たく思ひし」られたまへはさりともしよにおろかには「もてなし
給はしとおほせと我御身にてな」らひ給へる事なれはいとけな
きほとに「みをきたまはん事をよみちのほたし」にそおほさ
るゝ少将はおさなくより殿の「(三一才)うへとりてやしなひ
給ひつゝいとかなし」うしたまへは心やすし宮の御ことなど
まことにちかきほと「聞は我思ひたちし」やうにてこそはもの
したはめなとかた／＼「おほしをかるればたゝふしなからうち
や」すみつゝいとこまやかにかきて中宮へ「たてまつり給ふ返
／＼ひめきみの御こと」そか／＼せたまふおくつかたに「あ
さちふのやとにとまらんさゝかにの」あるかなきかをつねにと
はなんとてみ給「(三一ウ)へはてなとはことのほかにかはり
にけり」とわれなからあさましう見給ふいとく「るしければを
しやりたまふとのほつゐに」いかなるめを見るへきにかとおほ
さる「中宮にはいとあはれに待御らんしつゝ」いたく此世にあ

りかたりしさまなれば「まことになからへたまふましきにや
もしい」かなる事もあらは大将のこゝろのうちお「ほしやるに
いとうしろめたきまておほさ」るひめみやなとおはせてけに
つれ／＼「(三二才)なるにむかひよせてかしつかんはよきな」
くさめにてありなんかしほのかなりし「よめにもいとうつくし
うこそみえしかとお」ほしつゝ御返か／＼せたまふほとにうちわ
た「りたまふていつくのふみにかとのたまへは」かう／＼とき
こえたまふに心しみしあた「りなれはいとゆかしくてとりて御
らん」するにありしにもあらすそこはかとな「くみたれかゝれ
たれとなを人よりこと」に見ゆるをあはれに御らんせられて何
「(三二ウ)事もすくれてのみきこえしけに久し」かるましきに
こそとてなみたくませたまひ「ぬるこそ心ことに覚ししみにけ
るよとみ」やは見たてまつり給ふ御返こまやかにて「さゝ
かにをあさちかはらにとめをきて」いかてか露のきえははつへ
きとか／＼せ給ふ「御返たのもしけなるをうへはいとうれし」う
おほす此ほとゝなりてまめやかにた「のみすくなくともすれば
きえいりつくる」しうおほえたまへは姫きみのおひたち「(三
三才)たまふまゝにうつくしけにて我御かゝみ」のかけにいと
よくかよひたまひつゝ御とし「のほとよりはことのほかにしつ
まりてかた」はらにゐたまへるを見給ふになを是を「みすてゝ
あさちかつゆときえなんことはいと」かなしうおほさるればち
かくかきよせて「いたけにたり給はぬほとなる御くしの」いと
うつくしけにてゆら／＼とうかりた「るをかきやり見給ふに
いてあはれ我」もこの程にてこうへさきたち給ひにし「(三三
ウ)かくかきりなくおほししいりつゝかたはらは」なちたまはさ
りしおもかけなんほの／＼「おほしいつるにたゝわか身にたか
はぬ」心地し給ふいかなるさきの世の契り」にておもふへき人
／＼みぬくせのあるらん」とむかしの事おほしいてられてつく

／＼と「なかれいつるなみたせきとゝめかたけれ」は「おさなき御心にひめ君もいとかなし」うて御めになみたのうきたるをはつかし」けにおほしつゝうつくしけなる御にて」(三四才)めにちりの入たるとてすり給ふわかれ」の御さまやとかなしうおほされてあこを」はたれ／＼よりもあはれに見すかたくお」もひきこゆれとのかれぬこにはかなはさ」りければつゝおにゆきかくれな後はいかに」あはれなるさまにておひたち給はんと」いとしろめたけれとのなどゝをろかに」はもてなしたまはし又中宮にきこえ」おきたてまつりたればかたしけなくとも」わかかりとたのみたてまつらせたまへ」(三四ウ)あのつぼせんさいまろかならんあとにあら」したまふなかならずつくるひて御てつ」からほとけなとにもたてまつり給へものゝ」心つきたまふほとまてたにみえずなり」ぬるなんおもはしとおもへといとかなしけ」れなとおとなとにいはんやうにのたま」ひつゝけていみしうなきたまふをひめ君」はいとよくしつまりつゝうちそはみなき」たまふ殿はいま／＼おとろ／＼きまで」しそへたまふ御いのりのことなとさたし」(三五才)給はんとてたちのきたまひたりけるか」いまそいり給ひたる此御氣しきとをも」見たまふに又いかにおほさるゝにかと」御むねのひまなしつねはきえいるやうに」したまふをたゝおなしさまにこゝろよは」きまでおほしりつゝかきりあらん御いの」ちもいかゝとみゆるにすこしもいき出たま」ひぬるをはかきりなくうれしとおほし」たるを見たまふにもつゝあにきえはて」なんのちはいかは」かりおほさんとまことに」(三五ウ)おくらかしたてまつらんもうしろめたき」ほとにおほさるゝおとゝおはせしかはいか」はかりのけしきならましよくそさきたち」たまひにけるとおもひつゝけたまふに」この身をやつさてはかなくなりぬるは」いとつみふかきことゝむかしよりきゝたるを」

いかてかすこしもこゝろあるおひさまかへ」てんとおほしていとつゝましけれととのゝ」おはするにかくのみ日をへてくるしうなり」まさりてつゝあになからふへくも寛え侍ら」(三六才)ぬにおなしさまにていかになるはいと」つみふかき事と人も申をつねよりも限」りのさまにおほさるればまことにたゝ今」やとちめならんといはんかたなく心ほそき」にひめきみの御ふところ」にのみいりふし」給たるかいますこしこゝろみたしなれは中」将のめのとめて御かたへわたしきこえ」たまはんとしたまふをみしりかほに御」てにとりつきつゝなき給ふをいとゝかな」しうおほしりたりさいしやうなとも御」(三六ウ)前たちさらすおもひなけきたまへるを」かた／＼見すて給ふへくもあらねとかき」りあるみちはかなしき事なりければ」つゝあにきえはて」たまひぬるをとのは」人めもしらすおほされつゝ御かほのもと」にさしよりかきりあるみちなりとまかは」かりのほたしともをすてゝはいつちへお」はすおへきそをくらかしたまふなとゝこそ」よとゝもにちきりたてまつりしかとて」御かほのうへにふりかけ給ふ御なみたよ」(三七才)しのゝたきにもたちまさりていみしけ」なりさき／＼もかやうにものしたまへは」もしやとおほしつゝ御かちなといよ／＼ま」いりたまふにのゝしりうちつゝものも聞え」ぬまでなれと何のしるしもなくてときも」かはりゆきてあかつきかたにもなりぬれば」まことにきえはてたまひぬるにこそと」おもふにおほゆる人そなきとのほさらに」もいはすたゝおなしさまにてふし給へる」を人／＼はことほりと見たてまつるさは」(三七ウ)かりおさめたまふ御こゝろなれとおほしつゝみも」あへたまはすひとめ心よはきまでそ見え」給ふとのうへなとはかひなき御事はさら」にもいはすとまり給ふ人の御ありさま」おほしやるうしろめたさにたゝはひわた」りぬへくおほせとかきりあることなれば」御い

みのほとはおほかなくてえわたり給へはたのもしき人へを
そいとおほくまいらせ給へる中宮なともあはれにかなしう
きゝたまふうへは大将のころのうちおほし(三八才)やる
うしろめたさに中宮なともいとは「れにおほされてよそな
らたにひと御らんせす成ぬるゆくちをしくそおほし」ける
いふかひなき御事はさることにてとの「のかくおほしやうに
のしたまふをまた」いかにとあさましくおほされたりわか御
ころにもかくてしもいたうころよは「きやうにみえてんも
さすかにおほされて」見たてまつり給へはしるき御そともや
つはかりなよらかにて御くしのそはのか(三八ウ)たにうち
やられたるに此つきころとき「やりたまふこたになくてあり
つれとも」まよひたるすちもななくしら／＼として「御そのすそ
に一尺はかりやあまりたらんと」みゆるにすそなとのうきめも
ふさ／＼と「けさやかなりことのほかにうちほそり」たまひて
御そのかきりとみゆるに御かほ「はにほひやかにてまみのわた
りくちつき」なとみそめきこえたまひし月かけに「つゆかはり
たる事もなくてたゝねいりたる(三九才)やうにいつつく
しことしこそ廿に八はかり」あまりたまふいとさしもなき人た
に此ほと」のとしにてはわかくあたらしこそ見えぬ「へきに
まして這御ありさまいはんかたなし」なにとなくうちかほりつ
ゝうつくしき御に「ほひなとも日比にかはりたる事なし見たま
ふに又ものもおほえすかなしもおほるか」なりとにかくによに
なありそとほとけの「おほしたるにいまゝてなからへてかくう
き」めを見るよとおほせはむかしよりおもひ(三九ウ)そめ
たまひしみちそいとゝいそかれ給ふ「からうしてためらひつゝ
みゆつる人なとも」ものしたまはねは御てつからおりたちて
「さたしきこえたまふにもふりかゝるなみた」は物も見えたまは
す^{れい}のやうにしたゝめ「きこえたまはんとていまひとたひさし」

よりつゝ御かほ見給へはおつるなみたに「きりふたかりてはか
／＼しくもみえ給はすせんかたなくかなしうおほさるゝかく」
て三日といふにそおくらにちゝおとゝの(四〇才)御かたは
らへわたしきこえ給ふわかれの「中にもいま一たひのわかれは
なをやる方」なくおほえ給ふありかたかりし御有さま「なれは
おなしことゝいひなからさふらふ人」／＼なともこひしのひき
こゆるさまこと「はりにもすきたりたれも／＼とのゝうちは」
かきりあれば大将殿などのうすゝみ色なる「衣きたまふにつ
けてもわれさきたちた」らましかはふかくこそそめたまはまし
とお「ほすにたゝいくしほにもそめまほしう(四〇ウ)そお
ほさるゝ少将のきみのいとけなき程」なれと御ともしていとみ
たれかはしけに「なきまとひ給ふを見たてまつるにた」れも
／＼も今ひとしほのかなしさそひける殿はみちもみえぬまで
心よはけに「ある御氣しきなからおくらへおはしつき」ぬれは
かきりあるさまにしなきこえ「たまひてたゝときのまにむな
しきけ」ふりとあかり給ひぬるをなこりのくもの「たゝすまひ
まてかなしくなりゆくもさ(四一才)すかにてかへり給ぬる
後も日來たちな」れたまひしおまし所なとほとけの御前「にし
つらひなし給ふにてなれたまひし」御ものゝくはかなき御しと
ねまたたゝあ「りしなからあるに御そもあまたぬきや」られた
るか日比になりぬれとなつかしき「やうに打」○「ほりつゝ
たゝひとりとかたちのきた」まへるとみゆるそかきりなかな
しかりける「御まぐらのかたのしとねのしたにしろき」しきし
にものゝかゝれたるかあるをとり(四一ウ)て見給へはこゝ
ちもかきりのさまになり「給ひてをきふしきりたまひしこと
を」おほしてやかきたまひけん「おくれしとたのむる人も
しての山」こゆるみちをはえこそしたはねひめ君の「御事をなを
いとみすてかたくおほし」けるとおほえて「見ることにあ

はれつぎせぬたつの子に」とひわかるゝはなをそかなしき宮わたり（四二才）の事をおほしやりたるにやたれま（四三才）た」（四二才）すになと返々かなしうへに見わくへくも」なくふる事ともみたれかき給ひたるか」いとたゞしけにありし御でともな」きを見つければ、まふらん人たにこれを見てはいかにあ」はれならさるへきまして御かほにをし」あてゝさくよりもよくとみたれかはしきま」てなかし出たまふなみたにすみもす」か」れぬとそ見ゆるいまはとにかくにかひ」（四二才）あるへきことならねはこれはかりこそおほすにたゞいかならんことをしてたゞいまめうか」のくらひにさためをきたらんと」かた／＼おもひむすほをれたまひし御氣」しきをおほしいつるにいかてかあきらかな」るひかりあらせたてまつらんといとなみた」まひても猶おもはざりしことかなたちま」ちにかゝるいそぎせんといとなみたのひま」のなくさめにはよるひるわかす御経を」のみよみたまへはいかなるおりにかとたゞ」（四三才）もしのうへにふりかゝるなみたにくれつ」見わかれたまはぬそやるかたなくおほさるゝ」以此常耳聞三千世界声といふわたりをし」のひやかによみたまふかいひしらすたと」きにいたうはなこゑになり給ひてよみ」さしたまひぬるにすすゝろに人もかなしうおほゆるいつこにいかなるさまにてき」すらへたまはんとときかまほしくおさるゝに」はくむにことにえまほしくそおほえたまふ」なけきの中にも月日はゆくもの成けれ」（四三才）は五七日にもなりぬるにけふはくもり」なきかゝみのかけもことにはつかしかむなる」ものをといとかなしうおほさるゝに空の」けしきもことにをりしりかほにはれまな」きを御袖もかはく時なしけふもくれぬ」ときこゆるかねのこゑもうちそへたる念」仏の光かうはかはかりものおもはざらん人」たにももの心

ほそかりぬへししやうけち」といふわたりをきたまふにはおとなしの」たきもせきかねたり御けしきもむけに」（四四才）こゝろよはくきく人もやとつゝましう」おほさるつねよりも雲のたゞすまひなと」も物あはれに雪あられひまなくうち」ちる夕つかたなにとなくにしのやまもとの」かたをななめやり給ひつゝれいのなかしいて」たまふ御なみたはいみしけるな中納言のものよりいたうもみちしたるえた」のちりすきたるにつけて」なき人をこふるなみたのつもりいて」ちしほのいろにそむるもみち葉と有を」（四四才）見たまふにいとむかしおほしいてられて」やるかたなかりし物思ひのころかきりな」くなつかしかりしものをといみしう覚え」しかともなをそのよはこひしうおもひ出」られたまふ」しにかへりあわぬわかれにこかれつゝ」なけきころそいまはまされるとひとり」こかれたまふ中納言の御返事には」なき人をこふるなみたときくからに」ちしほに色もえまさるかなとそかきた」（四五才）まふ袖たにさゆるといひをきたるふゆの」夜なれば日数するまゝにいとゝかたはら」さひしくつゆめもあひたまはねはかた時」なくさむかたなくこひしくおほさるゝ人」のありさまさへゆめのうちにたに見給」はぬそ猶おもひやるかたなくそおほさるゝ」ゆめにたにまゝとろまれねはなき玉の」ありかをそことみぬそかなしきなくさめに」はれいの御でうすめしつゝきやうよみ給ひ」念仏のこゑにまきはしつゝ十羅世つ女」（四五才）うせにし人のありかまほろしの中にも」みせたまへとすゝをしすりたまふにふり」おつるなみたのしらたまかとみゆるをちかく」さふらふ人になとはかなしうおほえけるかき」りあれば四十九日にも成ぬるをなこり」おほく物かなしくしている日のかけをみ給ふ」にいとゝわかよつきはてぬる心地し給ふ」みし人もこふるなみたもかなしさも」いのちもけふにかきりてしか

ないとしのひ」かたけになかめいたし給ふ御けしきのいみ」(四六才)しうなまめかしうめてたきを見たてま」つる人はこれをけにい^はわにても有なん」とおほゆ僧ともい^てなんとななりいた「くなこりおほくおほさるればせう／＼はと」めたまひて不斷の念仏読経なとせさせ」給とのうへはかくのみおほしいりたることの「きえはてたまひしあはれはさることにて」うしろめたくおほさるればかた／＼の御いのりともせさせ給ふ日来見たてまつり給はぬ」たにこひしうおほつかなくおもひきこえた」(四六ウ)まへは御いみのあきてさへいふせきをいと」心もとなけにたまふもことばりにあはれ」におほされてはかなき世になからへて「んほとたにかくおもはれたてまつらしとお」ほしつゝ殿へまいり給はんとてあさやかなる「御しやうそくしたまひてきやうたいに」むかひたまひたればわれながらそれともみえぬ」まであやしう物あはれけになりたるも」まことひさしかるましきにやと心ほそく」おほさる殿うへはまち見たてまつり給ひて」(四七才)もたゝその人ともなくなり給へるをいと」あやうくかなしくおほされていたうしほ」たれさせたまふ御たいなとりまかなひ」てすゝめたまへはいかなるにかかやうのもの」にとりむかひたまふにもいと心地あしう」むつかしうおほさるれとあなかに覚し」たることをかくてなからへんほとたに心」つよくおもはれたてまつらししとねんし」返つゝとりむかひたまひたれといたえ」かたくおほさるればをしやりたまひて」(四七ウ)心のとかにさふらひたまふにつけても心」はそらなるやうにおほえしものをといと」しつめかたくおほされてやかてたち給」ひぬかへりたまひてもわくかたなくうち」かたらひてすくし給ひし^おもかけはな」を身をたちさらぬこちしてかなしう」おほえたまふひめきみのいとおさなけに」てわれをたれよりもいとをしきとてこそ」なきた

まひしになとかいづくへもくして」おはせさらんひさしう^みみたてまつらぬは」(四八才)こひしきとてめをすりたまふを見給ふに」いとゝせきやらんかたなくて」なをしの袖^{きぬ}をしあて給へるよりもりい^つつ^くの^{ところ}せけ^さをあやしとうちしつ」まりつゝ見給へりとのくれにもなり」ぬれば仏名なにくれと世中さはかし」けれど我御身ひとつはつく／＼とこも」りおはするをかきりあらん御いみのほと」こそあらめひか／＼しきやうなりとき／＼」はさしいて給へなと大殿はきこえ給へ」(四八ウ)とこのゝちはなへてのよううらめしくて」人なにもさしむかひつゝたいめんし」給はんも今はまはゆきまてにおほさる」れはみたり心地わつらふよしをのみよと」ともにそこしてついたちなにもこ」もりぬたまへりこうへの御せうとのちう」なこん宰相なとそつねにひきつれてまい」りたまへるにそとき／＼たいめんし給ふ」おとゝかくれたまひにしのちはひとへに」たのもしきかたにもたのみきこえ給へる」(四九才)にかくうしろめたけなる御氣しきを此」人／＼もいとゝわひしうこゝろほそくみ」たてまつり給へり中宮の御もとよりお」かしき子日のえたにつけてひめきみの」御もとへ」へをきし人はなくともひめこ松」いまは雲ににおひのほらなるとかゝせ」たまへるを見たまふにおもひたつほいかな」は誠にひとすちにこそゆつりたてま」つらんすめなとおほして御返かゝせき」(四九ウ)こえたまひて見給へはこのほと人の」しわざともなくいとうつくしげなること」はりそかし誰にてかはとおほす」ひめこ松ひく人なくと雲井まで」おひのほりなんことをしそもふ少将は」大とのゝこひしかりきこえたまひて御」いみはてにしかはやかてむかへたてまつらせ」たまひてきまことやこ^うう^きてんの宮の」御こと十月ときこえしもこの人の事に」覚しあきたりしかはほ^いなく^てのひ」(五〇才)

にしをいまはいとゝわくかたもなければ「みそめたてまつりては又よにおろかに」はおもひきこえしいたくおもひ入てこも」りいられためればこのほといひいてゝも」中／＼に心つきなかりぬへしいみしと」いふともわすれくさおひてもや有ぬへき」とおほして八月はかりとおほすなるへし」大將殿は月日のゆきかはるにしたかひ」立なれたまひしおもかけはこひしうはか」なくかたらひたまひしことのはのみわす」(五〇ウ) れかたくおほさるゝまゝにはありしより」やかと御しやうしんにておこなひ給ふ」さまをちかくつかうまつる人はふりかた」かりける御おほえのほとゝ見たてまつる」にいとゝをしうかなしう覺し給ふをの」つからなけのすさひにもたちよしたま」ひし人／＼にも中／＼このゝちは露覺」しもよらぬをうらめしなからこゝろくるし」うおもひきこゆるへもあるへしやよひの」つゐたち比にもなりぬればおもふにもさ」(五一オ) はらすつねよりもことなる花のこすゑを」うらやましうみたまひて」さくはなもあるしもおなし我ながら」なかくし人のなきそわひしき十日よひ」の月はなやかにさしのほりてをくら山の」ふもとまたとられしかしとおもひやりて」れいのつく／＼となかめふしたまひたるに」きんのねきゝはしめし月かけよりして」つゆときえはてたまひにしゆふへまでの」事かきつらねておほしいつるにくまなき」(五一ウ) かけもけに雲かくれぬるにやとおほさるゝるまでかきくらされてはか／＼しう」月のかほみえすせめてのなくさめつねに」ひきなれ給ひしきんをとりいてゝかきな」らしたまふにことのほかなるちりつもあり」けるもいとゝうきねのみそふこゝ地した」まひて」身にしめておもひしことのとしらへをも」いまはうきねにひきそとめつるとそ」ひとりうたれ給ふれ」佛の覺しつゝけつれば」(五二オ) 袖のしからみせきかねられて」あふせあらはなみたの川に身をなけて」そ

このもくつとなりもしなましとてうち」ふしたまふとこもいとゝものこゝろほそく」ひさしければ露御めもあはてわか身もうきぬるこゝろしたまふうちにあかつきかたに」いさゝかまどろみたまへるに女君有し」なからの御ありさまにていたくものおもは」しけにうちなきたまひて」ふりかゝるなみたの雨にいとゝしく」(五二ウ) をくらの山にまよふとをしれいたう覺し」入たるか我身にはいとくるしき事にて」侍ると見給ふをあなうたておはしける」そとてひきとゝめんとし給ふにやかて」うちをとりき給ひぬゆめのおもかけたち」そひたる心地してかなしともをろかななり」いかてゆめのうちにもとおほしつれとま」とるまるゝ夜なかりつればそのゝちをの」つから見たまふ事もなきにほのかなり」つる御有さまをみたまひてはいとゝな」(五三オ) こりこひしくかなしさまざりてやるかた」なきにはやかて御てうつめして経よみ」たまひていかに世そとのたまふおほしい」つれば世つすきやうをしみやうすなと」いふわたりはことに御めとまりてをししかへし」つゝよみたまふところ／＼にすきやうあ」またし給ふにしたいのはなたちはな」さかりなるをたゝひとりなかくめふし給ひ」たるおりしりかほにほとゝきす落かへり」つゝなけは」(五三ウ) しての山こえてやきつるほとゝきす」わかれし人のゆくゑをしへよいかにそや」覺したりしゆめのおもかけはわすれかた」くおほさるれはいかてかくおもはしと思ひ」かへしたまふにもつゐにおもひそめにし」ほかなひてすゝしきやうにみましきこ」えたらんそのよにはうれしかるへきと」おほせは月日のゆくもこゝろもとなきに」かくてこもりいたまひたるをいとくち世しくおほしたれば今いくよか見たてまつ」(五四オ) るへきおなしさまにてすくさんほとたに」こゝろやすくてみえたてまつらんとおほせ」はこのころとなりてはとき／＼うちな」とへもまいりたまひつゝす

くよ（小）なる御」けしきをみかとはしめたてまつりて「されはよにわすれくさおふるならひな」これは今はかやうにてなくさむへきに「こそと御らんしておとゝのまいり給へる」にこそ冬ほとならてくれにし事を「いたくおもひいはれたりしほとは中／＼（五四ウ）おりあしきやうにて（五）となかりつるを此」ほとはすこしよつきてゆ（六）に用意有」へけれなとけしきたゝせ給ふむかしやう」に世にすみたまへしとゝろやすくお」ほされてのやかなるひるつかた大将の「まいり給へるにひとひもうへのしか／＼」のたまひしたひ／＼をとりかさせ給ふ」をさのみきゝすくしたまはんもあやしむ」へけれはいまはおほしわくへきかたもな」ければとき／＼は文なとたてまつりた」（五五才）まへかしとのたまふをいとゝおほしたつかた」のほかなふへきにこそいつまでかくのたま」はんもとあはれにおほさるればすきにし」かたのやうにもてはなれてもきこえたまはてかたしけなき御ゆるしをいかてかうけ」ひきたまはぬことは侍へきたゝつねはみたり」心地よからぬやうにてかひなき身ながら」たにえなからへて侍るまじきにやと人の「御ためもふ便にて今まですきさふらふ」めるを猶御ゆるされ侍らはめんほくに」（五五ウ）てこそさふらはめさ侍ともみゆつるひと「なともまたなくこゝろひとつにいとなみ」侍る事すきて冬つかたにて候へかしい」つしかこゝろえぬものいとなみもいかに」そやさふらひぬへしついでにはさやう」にもそうせさせ給ふへくやとすくよかに」のたまふをいとめつらしくうれしと覺し」たる御けしきとも見給ふにあはれにつ」みうらんかしとそおほさるゝゆふつかた」うちへまいりたまへればかきりなくめつら」（五六才）しくおほしつゝ御対面心のとやかなるに」ことのほかにおもやせたりしもちかまさり」になるめかしう「優成さまを今（は）ひとへに御かた人とおほ（は）するにいとゝ御めと」まるそを

こましきやともすれはうち」しつまりつゝなめかちなるをことほりに「あはれに御らんすくれぬれば中宮の御かたへまいりたまひぬめつらしとおほし」つゝうち御らんしをこせたる御くしのかゝり御まみのけしきなとゝゝそれかと覺」（五六ウ）ゆるまでおもひいてられたまふにいとゝゝむねいたくなりまさり給ふに二のみやの「いとうつくしけにてなれよりつゝむつれ」かゝりたはふれたまふそあはれにらうたく」おほしたまふみやはひめきみの御事など」のたまひいてゝいとゆかしけにものせさせ」たまふをけにこゝろのうちのほたかは「すは此みやにこそひとへにゆつりきこえ」め大殿は少将をいとかなしうしたまへは」それはこゝろやすしなとおもひつゝけ」（五七才）たまひてまことさやうにもおほしかすまへ」られてめしよせさせ給はんはほかなひ」ていかううれしく侍らんむかしの人も今は「のおりまでさこそおもむけて侍りしかと」申たまふをけにとゝむかへて宮のたゝいかゝ」かしつかまほしくおほさる秋にもなりぬ初」風たちぬれはいとゝよな／＼ねさめかちに」てつねよりもむかしこひしくおほされな」から七月七日にもなりぬればたえぬ契り」のほともうらやましくて」（五七ウ）七夕のあふせをみてもかなしきは」かきりもしらぬわかれなりけりせめての」なくさめにはきんをそかきならしたまふ」這月比かやうのものなどにはか／＼しくて」もかけてのみすきたまへるにおほしたつ」かたのまいりそかれたまへははかなきすき」ひもまたいつしかはとあはれにおほされて」はんしきてうにしらへつゝねのかきりかき」たてまつるに我ながらこゝろほそくおほえ」給ふにもなにこともあなかにとおとりく」（五八才）ちをしうはなかりける身になるむくひ」にてとにかくにものおもひつゝつめにいた」つらになんするよといとかなしう覺え」たまひこゝろてんの御事うちにおとゝ」そうしたまひに〇

かはさもあらは霜月はかり」にといそかせ給ふをさかのゐんにもこゝろやすくきゝたまひてさりぬへきこととも「せう／＼とふらひきこえ給かやうの事を聞」たまふにつけても大將はいととうき世を「いてんいそきのみせられ給ふ文の事なとを」(五八ウ)とのうへはたひ／＼すゝめきこえたまへと「なけのことはもかやうのことはいと心ゆかす」おほしたりしことなれはとおほしいづるに「こゝろならぬことゝいひながらなき御かけ」にてもおほさん事かなしうてたゝかたし」けなきよしにのみもてなしへきこえたまふ」かゝるたひにはあはれわか世のかきりやと「うれしきかたにさへおほえたまふにもおもは」すにあきたりしうきてんのほそとのゝ三のくちのしるへのよおもひやりにく心た」(五九オ)かきもてなしならましかはいかに人のため」にもむけにこゝろくるしからましなとよく「こそこゝろはおさむへかりけれと我なから」こゝろをこりしておほさるあしとはなけ」れとよすかとたのむへくはなかりしほか「けはいとゝものうくそおほさるゝ中宮へ姫」君わたしきこえ給はんことはおなしく我み」るをりにもと覺しなりて中宮にも八月」はかりになと申給へはいとうれしとおほ」すわたりたまはんことゝもいとちかくなり」(五九ウ)けるにたいのまへせんさいやう／＼ひもと」きわたして見ところあるを姫きみ見」たまひてはゝのつくろひてあなかしこか」らすとき／＼はほとけにたてまつれと」のたまひしものを「そにおとりたるに」やとておりてとのゝむかひ給ひたるほと」けにまいらせんといとなみ給ふかいとあはれ」にて中將のめのもしほたれいたるとこゝろへおはしてひめ君をかきいたきつゝはし」ちかくみたまひてなかくめいたしたまへは」(六〇オ)色しの花の中にくはんさうのいとはなや」かにさきいてたるをなにはかはりたる心」地して」見るからにしのふそしけるいにしへを」わするゝ草も

たれかいひけんとしのひて」のたまへは中將のめのと」わするとはかなしきことをかくはかり」おもはぬ人やいひはしめけんとしていと哀れ」とおもひたるけしきをけにいかにこゝろ」ほそくおもふらんときゝたまふ中にも」(六〇ウ)をみなへしの露をもけにてかせにかたよ」るをおきふしわひ給ひしけしき覺し」よそへられて人しれたすを」しあてられた」まひぬひめ君をかくつねにみならひて」宮へわたりなはさすかにこゝろやすしも」えあるましきそかしとそれさへ心ほそく」覚え給ふかくて中宮へまいりたまふへき」日にもなりぬれば日来なれたてまつり」つる女房などのさのみはまいるへきなら」ねはかたへはこれにとまりなとするを」(六一オ)いとゝなにゝなくさまむとこゝろほそけに」おもひつゝよりあたるも心くるしうおほ」さるまいる人／＼は此ふるさとをさへかけ」はなれんことをいとおはれに」おもひたり」ひめきみはなにとなくしたてられ給ひてこののほかに」おとなひ給ふまゝにあやし」きまで母うへにきこえ給へるそいとゝしのひかたてしほたれ給ひぬるみやに」はまち見きこえ給ふにかきりなくうつくし」うおほされてたゝわか御かたはらさらす」(六一ウ)もてなししたてまつりたまへはうへも御らん」していとあはれにおもきこえ給ふ女宮」などもおはしまさねはみや／＼の御いもせ」とそめてなし給へる大將殿はうへの御」はてもむけにちかくなりぬればひつし」のあゆみの心地してさすかに心ほそく」おほさるかきりの御ことをおほせはいかな」らんことをつくさんと覺しいそきたり」日にしたかひてはひとすちにおほし」たゝるれば御ものゝくやう／＼したゝめ」(六二オ)たまふなかにことのおりふしにつけては」おかしきたはふれ事なかきすさひ給ひし」かみところ有しかきりえりとゝめ給へる」ものと中よりとりいてられたるにたゝ」それにこそと見給ふよりかきくらさるゝ」心地しつゝ

はか／＼しも見給はすまして「こゆるみちをほとかき給へりしたうかみ」を見給ふにたゞ御かほにをしあてゝため」らひやり給はねはこのことによりいたく「心よはけにのみみゆるも人めつゝまし」(六二ウ) てなにとなくをしやりたまひて

見るたひにかなしきものはしての山「こえにし人の水くきのあととそひとり」にたせたまふいとゞこゝろうさまさり給へはつみふかきさまにのたまひしにいかで「かくおもはしと覺てやかてやらせ給ひつゝれうしになして御きやうかゝせ給ふ」九月つこもりになりぬれば我身も秋も「このくれにかきりはてぬるこゝちして」中納言のもとに(六三才) わかれにし人をこふるにいとゞしく「かなしさそふるあきのくれかなとあるを」つきせすかく覺したるこそとすきにし「かたのかなしさいとゞたちかへる心地し給ふ」御返には「かなしさもくれゆく秋もいとゞしく」とふことのはに露そをきそふまことにむけ」にのこりすくなく成にたる心ちし給へは「いま一たひのたいめんもあらまほしかくて」さかの院へまいり給ふみちのほと大井の」(六三ウ) わたりなとやう／＼色つきつゝたつたひめ」もわきそめてけりで見ゆる木すへともを」おもふ事なからむ人はしめいかはかりけう有」てなかめんとみわたしたまふ」をくら山みねのもみちはいろつきぬ」なけきのみこそときはなりけれまいりつき」たまひぬれば院はいとめつらしとまちよろこはせ給へるにいまはいとゞ我御かた人」なる心地し給ひてあらはれに御らんせらる」いたうしつまりつゝなまめかしういみしき」(六四才) 御もてなしにことのほかにおもやせ給へる」もあくまてなつかしうあはれに見えたまふ」まして人めまれなる山里にはいみしき」ひかりとおほしたりにうたうのみやなどとも」まことにおとなふるまゝにありかたくこそ」みゆめれなどのたまふくれかたに成ぬれば」いてたまふにもたゞけふにとちめた

る御」たいめんはいかてか心のうちにもあはれに」おほさるへきたちかへりつゝいてもやら」たまはす月まちいてゝはおくらの御はかへ」(六四ウ) とおほすにもまつきたつものはなみた」なりけりあれに御覽するよりななれいづる」御袖のしづくれ〇の大井のしからみもかな」はすやとみゆるおりしりかほに月もか」きくもりつゝうちしくれぬるもいとゞかなし」いかなるむかしのちきりにていにしへもみに」かふはかりもののおもひいまは又つゐにいた」つらになるらんかゝる事なからましかはたち」まちになにのゆへにかはうき世をもいと」ひすつへきとおほすにはつかのまもあか」(六五才) すおほししらるゝときもかはりぬれとかひ」なきこけのうへたにみやこのほかならんす」まひにてはえみたてまつるまじきそかし」とおほすにそ今ひとへたてんわかれ」もいとかなしうてとはかりたちのかれ給」はすかへりみかちにてゆきやられ給はす」あかつきかたにかへり給へれとけふは御」はてなればやかてうちもふしたまはておこ」なひ給ふにも」かなしさもこふるなみたもつきせぬを」(六五ウ) なにをはてとか人のいひけんとおほし」つゝくるとうしんの九たいのあみたこくらく」のまんたらなとくやうし給ふ大かたの有」さまもいとおとろ／＼しきまてしたまへり」かはかり御心にいれたる事なればわれも」／＼とさふらふ人／＼もつかふまつるなる」へし中にも御てつからかき給へるはいと」こまやかたにたうとく申あくるにも若有」女人聞是惟典のちかひたかふ事なく龍」女かあとを拂ひて無垢世界成道となへ給」(六六才) はんことむちうのそのこのもにかせはらか」にしてり和恵ちのたもとをひる返はくと」くちのいけすゝしうしてほうす禅悦食」のあちはい」にほこりましますらんなどい」たとのもしういひつゝけたるけにけふの」うちにこゝのしなのかみのくらひにと覺し」いそきたるさまはいかてかむ

なしからん」少将の君のきひはなるへきほどにあく」ましてしつ
まりつゝなに事もおとな／＼」きよいいをこゝろややすくも又
いまし」(六六ウ)たにみすなりぬる事よとさま／＼にかなし」
うおほさることゝもはてぬれはいまは」このくれはかりこそと
やるかたなくこゝろ」ほそくてはかなく御てならしまへる」
御ものゝくをましのおたりまでれいのめ」のみとまりつゝ人わ
ろく御なみたのこほる」るをちかくつかうまつる人／＼などを見
た」まふにもいてあはれこゝろへうせいたまひて後」はひとへに
我をたのみてたのもしく思ひ」たるにいかにか心ほそくおもひあ
はん哀に」(六七オ)いとをしく見給ふなにとなく御こゝろも
あはぬやうなれば御ものまいらせて大武」のめのかいかにも
物を見いれたまはぬ」とわふるけにこそとのたまふてつから御
たいまいらせはしとりまかなひてなにか」やとそゝのかし給
ふ御けしきを見給ふに」いてあはれうるはしくて見えたてまつ
らん」事もたゝいまはかりそおなしおやことい」ひなからいと
かくまで覚したるにいか」なるやみにおほしまとひ給はんとす」
(六七ウ)らんかきりあらん御いのちもいか／＼など」おもひや
りいとかなしくこゝろよはきな」みたもこほれぬへきをねんし
てまはは」いつかはとみきこえ給へは御としもこと」のほかに
おとなひたまふにたれとおやと」もなくわか／＼きよけにみ
えたまふこと／＼」なくふた所我御あつかひのみし給ふに」
もの覚えしほとより御はたはらさらず」ならひてけふまでもみ
たてまつらぬ日は」すくなくまた見えたてまつらぬをはいと」
(六八オ)おほつかなくうらめしきことに覚した」るにいつを
かきりともなく此世にてみた」てまつらんこいとかたきき
いかはかりこひ」しうおほえたまはんとおほしつゝくるに」た
ゝめもきりふたかりてくれまどひ御」かほもはか／＼しくみえ
ねとよくしつ」めつゝこれをたにこゝろやすくとおほし」てい

たくすゝめたまふ御たいをむかひた」まひてこゝろにもあらず
とゝめかねられ」給ひぬるなみたを殿うへも又いかに」(六八
ウ)おほすにかことのほかにけしきもなをり」たりしにまた此
ほとゝなりてかく覚し」入たるにこそいとわひしけれひめ宮の」
御事をなをこゝろえすおほすにやとむ」ねつふれたまふ大將殿
もしつめかたきけし」きをいか／＼御らんすらんとこゝろのおに
ゝ」つゝましくてすへりのき給ふにもこゝろ」のうちをしらせ
たてまつりたらはといとゝ」かなしくおほさるかへり見かちな
からは」よりやかて内へとおほすに少将の御を」(六九オ)く
りにおはしたるを見給へは我が／＼みのかけ」にいとよくにたま
ひておひ出給ふにした」かひてなまめかしうのみなり給ふをい
と」あはれにおほしてたちかへりつゝいまたいふ」かひなきほ
とにはゝなともなく成にしか」は又見ゆて久しくの」みおほ
ゆるを殿うへなどのかくあはれなる」ものにし給ふそいとこゝ
ろやすき我いかな」らんよにも宮つかへをこたらすしたてま」
(六九ウ)つりてつかうまつりたまへとのたまひ打」なきたま
ふをおさなき御心にもあやしう」おほえたまひてとはかりも
ものたまはす」うちかしこまり給ふひもくれぬれはうちへ」まい
り給ひぬうこんのちんいりたまふより」としころたちなれにし
くものうへもこよ」ひはかりそかしとあはれにとゝめかたくお
ほさるゝまして宮の御まへにてはえし」つめやり給はぬをれい
の御くせそかしと」おほせとつねよりことなる御けしきを」(七
〇オ)かくのみよとゝもにものしたまふはけに」いかなるへき
にかと我もあはれにてなみ」たくまれたまひぬなに事を申たま
はん」とおほすにもさきたつものはなみたなり」人めつゝまし
くおほさるればつねはみた」れあしけにこゝろよくも侍らて
なか〇ふへく」もおほえこぬにいとゝひさしかるましき夢」

などの見えさふらふはか／＼しからぬ」身なりともみやつかへをたにしは侍ま」しきにやといとこゝろほそく侍と申」(七〇ウ) たまふをみやもたのもしけなくきかせ」給ひてをしこのはせ給ふあまり心よはけ」なるけしきもさすかにおほされ立」のきたまひつゝひめきみの御かたへおは」して見たまへはぬいりたまひたるにや」うちふしたまへるやをらよりてみきこえ」たまへは御くしはふさ／＼として打」やられたるにふくらふくしとうつくしけ」なるかほつきいはいけなきひともなく物」はつかしけなるまみのわたりむかし」(七十一才) おもかけによくかよはせ給つるかえすてや」らすかなしくてほろ／＼と御かほになみ」たのこほれつゝかゝりぬるにおひてうち」をとろきたまひてみあはせたるにあきれ」なともし給はて此日ころつねにも見た」てまつりたまはぬけにやうちほちしらひ」てなつかしうらうたけなる御さまを唯」今はかりそかしいまいふかひなき程に」われさへゆくゑなく成なはいとはかな」きさまにてやをひたちたまはんとお」(七十一ウ) ほしつゝくるころのうちにまことに」ひとかたにしもすまずみたれつゝかなし」うおほされてたゞ御なをしの袖もし」ほるはかりなるを見たてまつるに中将」のめのとまうちなかれぬほともへぬれ」はおもきはしけにおほしたれば這た」ひはいまとくまいらんとしたまへはうち」うなつきて見をくり給ふ御かほの見す」てかたさはま〇とにいる山路のほたしと」そおほさるゝとかうやすらひ給ふほとに」(七十二才) ありあけの月もいま山のはよりたち出」たまふこうきてんをすき給ふにおもひ」よらさりししよるのかたはらめなへてなら」すとしはなかりしかともなつかしかりし」ことのねなどおほしいてられてさても」よそなからのみやみぬる御ききのあ」さゝもこよひは中／＼さすかにおほされ」つゝものあはれなるものよひとつならす」後の世まで

かく成ぬるよとうれしきかた」にもおほされて」(七十二ウ) 晨明の月もろともにすみなれし」くものうへをはいませぬると覚しつゝ」けてせんちしきしやせたいぬえんとい」ところほそけにうちあけつゝうこんの」ちんを出たまふにもおほえし程よりは」おほつかなき事なくたちなれにし九重」にこよひわかれはてぬるもいと／＼かなし」うおほされてあひも」おもはぬといひけ」る人のこゝろのうちも思ひしられて」かへり見かちにて出給ひぬありつるお」(七十三才) ほむきやうをいまゝてねてきく人あり」ければそゝろに物かなしうなみたこほれ」てそおほへける大将のかへりたまひぬれは」つねにもおはせぬかほむていのかたに忍」ひていりたまひてふみかきたまふ殿うへ」見給ふへきにはきのふ此よし申さましく」さふらひしかともさらぬたに御ゆるしさふら」はしと申いてゝは中／＼御きそくそむき」侍らんはかた／＼つみさり所さふらはしと」おもひ給ひてはかなき世のありさまは」(七十三ウ) をくれさきたつならひにてのみさふら」へはつゆおほしめしなけかせたまふなをし」みとゝめさせ給ひても今いく世かはさふら」へきたゝいまはいとけなく候へともおひたち」さふらはんはほと候はし少将をかかりには」めしつかはせ給へゆめ／＼おほしなけかせ」たまふ事候ましあなかしこ／＼はかなきや」にとゝまりいてこゝろほそけにさふらはん」人／＼おほしめしはゝくませ給へと有中」宮のにはよへもけんそなるやうにてなにと」(七十四才) なくていて候にき又みゆつる人なくくち」をしく候へとも少将をおなしことにめし」つかはれさふらふへしまたもとよりまい」らせをき候にし人の事はさりとともに」をろかにはもてなさせおはしまさしと」こゝろやすくおもひ侍られさふら殿うへ」はやみにまとひつゝおもひみたれ給ふ」らんせいしおはしませとそかゝれたまひ」ぬるいづれもれいのやうにうはかき

うちし」て御まくらにおかせたまふに筆のつゐ」(七四ウ)てにそはなるかみに」かなしさにてたえぬけきをこりつめて」うきふるさとをかれそはてぬるとかき」つけたまふかねのまともたひ／＼になり」ぬれはなにとなくこゝろあはたゝしき」やうにて出たちたまふにもはゝうへの時^(世)日にけしき覺しいてられつみふかくおほさ」るれとしつたいたんとくせんへいり」たまひけんにしやうほん大わうもさこ」そはなけきたまひけめとおほしなして」(七五オ)御むまにのりたまひぬ御ともには大二の」めのとの太郎にてうこんのくらひとよしす」いかなる御あるきにもたちをくれきこえぬ」はかりそつかうまつりたるかくて出たまひ」ぬれは日ころたちなれ給ひしやとのこ」す^(世)もやう／＼とをさかりゆくかさすかに」あはれにおほされて」ありはてぬかりのやとりをふりすてゝ」まことのみにちたつね入かなあかくならぬ」さきにと御むまをはやめつゝ中たうの」(七五ウ)かたへまより給ふを目比の御けしきもあ」やしとみるお^(世)り／＼有ければたゝさな」りけりとおもふよりよしす^(世)か心のうちそ」やるかたもなきほとなくまよりつき給ひ」ぬれはこゝかしこなどうちお^(世)かみていつこ」とおほしをきたることしもなければ思ひ」わつらひつゝうちなめ給へる御たひ」すかたのかゝる山中にてはいとゝひかる」やうなるをつ^(世)小にいかてみはてたてま」つるへきにかとかなしくてみたれかはし」(七六オ)きまでなきけるを君もことほりと哀」に見たまひて横川のかたへそ又おは」するたゝみちにまかせてたにふかくたつ」ねいりたまへるに人のかよひたるかたも」なくとりのあともみえぬたにのそこに」二三けんはかりあるくさのいほりの有を」いとうれしとおほし^(世)たつねよりてみた」まへはいたくをこなひけると見えてうち」さらほひたるそうのとし六十はかりな」るたゝひとりほくゑのくやうほうして」(七六

ウ)いたりいとおもふさまにおほされて一さ」はつるほと念しすくしていたまひた」るをこなひはてゝこのそういとあや」しけにおもひたれはちか^(世)さしよりて」年比ほ^(世)ふかくてこの世にこゝろとま」らさりつるよしをかきくときつゝのたま」ふにすへてまこととおほえすてんまな」とのこゝろみんれうにするこにやと思へ」御ありさまのあし^(世)せんのためにもいひしらすなつかしうあはれに見え給へはうち」(七七オ)なきつゝかくはかりおほししみにける御」こゝ^(世)この世ひとへならすたゝとく侍れと」かゝる身にたにしのひかたし侍る山おろし」のけはしきをこけをころもとしても風」をふせきてのみすき侍る身ひとつたに」かなしく侍るにいとかくあたらしき御」さまをやつしすてゝいかてかた時もすく」し給ふへきとてゆるしきこえんさまにも」見えぬをいとこゝろうくものたまふかなつ」ねに三^(世)かい火宅にむせひつゝいつる事」(七七ウ)なくりんゑのきつなにまとはれてしゆ」つりのはうほうもしらすまくらさため」ぬゆめのうちにまとひつゝつゐになら」くのふるさとへかへりなんこゝろうくはお」ほされぬにやほとけもすしやうりやく」をこそさきとしたまへかくはかりおもひ」たちて侍ることなればこゝろにはいなと」のたまはゝいつくへもまかりなんいみしか」らんれうらきんしうにもこけのころも」いはのまくらはこよなくかへまさらに侍」(七八オ)りぬれければなつみ水くみてもたのし」みのせかいへまより侍らんこそとしころの」ねかひにて侍らめとていとくち^(世)せしとおほしたる御けしきはいひしらすめて」たく札のさほうにとりまかなひかくや」つしはて給ひぬれはあし^(世)せんのかけ」のころもきたまふとて」色／＼にそめしたもとを今はとて」こけのころもにたちそかへつるとそな」かめられたまふよしすゑ見たてまつる」(七八ウ)こゝちをろかならんやはとしころなに」事につけてもよにすく

れ人には立」まさり給ひつる御さまをいかで令す」こしゆるきなきさまになしたてまつ」らんと雨風につけてもいたはしくのみ」ならはしたまへりし君をたゝ時のまに」かくみなしきこえてはわれかたときおなし」さまにてなにゝかはせんとおしまろひ」なきのゝりてやかてほうしになりぬる」をこれさへいたつらになりぬるよとあは」(七九才) れに見たまふかくてはいとおもふさま」にてこゝろのうちもすゝしくおほされ」てつみふかけなりし人の御ゆくゑもい」つしかおほしやりつゝおこなひたまふ」きやうには殿うへなにとなく心さ^あけき」するやうにてうちとけても御とのこも」らぬにゆめなどいといこゝろえすものさ」^あけしきやうなればあけもはてぬ程に」三条殿をたつねきこえ給ふにきのふそ」の御かたへわたり給ひにしのちはいまた」(七九ウ) かへらせ給はぬよしを大貳のめと申た」れはいかなる事にかと御むねさ^あけきて」又た^あいりをたつねきこえ給へとよへ出たま」ひにきなときこえ^あするにいとこゝろ」あ^あけ^あゝしくおほさるゝほとに大貳の」めのと御ていのかたを見るにこゝろえぬ」御てならひつねのことくさといひなから」いとまか／＼しきにかたはらに御文二つ」あればかきつけのまゝにとりて殿うへは」御ふみときゝたまひて御こゝろおち^あゆて」(八〇才) いそきあけて見給へはいとよくかきつ」けられたること^あもをみ給ふに御心の」うちなのめならんやはゝみやものもい」はすひきかつきてやかてふし給ひぬる」後みしろきもしたまはすゝなき人の」やうにそものし給ふあやしけなること」ものあまたあるたにおやのこゝろはみな」うれしくおもひすてかたくこそおほゆる」になくさむかたおはせすみん内をはしめ」たてまつりて世の中にとりてさへさい」(八〇ウ) かくみゆるかたちにつけてまたなくいみし」きひかりとのみほめのゝしられ給へる」御ありさまをゆくへなくまとはし給ひ」ぬる

はけにときのまにかきりあらん御い」のちもいかゝとぞ見えたまふ殿はいまは」さすかにのこりすくなく成たるわれら」を見をきてはいみしからんほとけの御」むかへなりともいかてかさうなくま^あよりた」まふへきいとかはかりまておもひまとはし」たまひてはいみしくねかひたまふらん」(八一才) みちのさまたけにもならずやあるへき」かくまておもひすてられたまへる身は」はつかしくもつらくもあればいかでかくお」もはしと覺しかへせとつねよりもおもひ」みたれつゝたちたまひしおもかけおほ」しいつるまたしきに人わろくこひし^あ」た^あかたくて御こゑもおし給はすな」ことをいとかくまておもひてさはかりあ」たらしかりつるさまをいまはやつしや」はてたまひぬらんたな心のたまよりも」(八一ウ) 猶あやうく朝夕の出入につけてやすき」そらなくいたはしうのみおもひならはし」たるにかきりあらんわかれにてたに」わするゝよ有ましきをゆくゑもしらす」まとはし給へるには猶つらくおほえ給ふ」にかへす／＼おもひなけかせ給ふなどのみ」かきたまひたるもしやうすみつきなど」おほえぬこゝろにも今はいとかきりとお」ほすにやいひしらすみところ有てうつ」くしきをひさしかるましうてやよろづ」(八二才) かくのみすくれたまひけんとにかくに」あしすりとかやもしつへくもまとひた」まへる御さまそこと^あけりなりたゝいまの」うちにもそりすてゝいつちも／＼おはす」らんとこゝろへ行かくれまほしくおほせ」とさすかに少将のことをおほしすてぬ」なるへし少将のきひはなるへき程なれ」と此ことゝもをきゝ給ふにうちなきつゝ」かたらひ給ひし御けしきはこと^あけりなり」けりといまそおもひあはせられていとか」(八二ウ) なしうおほさるゝもしやのな^あさめには」わかちつゝ山／＼寺／＼もとめきこえさせ」給へとさはかりおほし入にしたにの埋木」はみいてたまへる人なし中宮もこの」文御らんする

にあはれにかなしうおほさ」るゝことかきりなしつねよりことに覺し」みたれたりしありさまはまことにあ」やしかりしかとたゝれいのことなとゝのみ」おもひつゝはか／＼しうきこえさする事」などもなくてやみにしよたのむ方なく」(八三才)ものこゝろほそくさへおほさるゝおなじし」もせといひなからかきりなくおもひかはし」たる御中なれはけいかてかをろかにおほ」されんひめ君はかやうの事をきゝたまふに」母うへのおりはさすがにいまたおさなくて」はか／＼しうおほしわきたることなかり」しにこれはいとあはれに我ゆくすゑ物」はかなくおほされてしほ／＼となき給ふを」中將のめのと見きこえさするもいとかなし」御かともかくきかせ給ひてさはかりのこの」(八三ウ)よにありかたゞさまをなに事によりさ」しもおもひすてけんとははれにおほされ」つゝをしのこはせ給ふ殿うへのいたく覺し」いりてはかなき御ゆなどたに見いれたま」はて日数ふるをかひなき御ことはさる事」にてこれさへいとおそろしくあや／＼くお」ほされて宮もなくなきめきこえまほしく」おほされて御いとま申たまへと御けしき」もつねよりもうしろめたければゆるし」たてまつりたまはぬをいとほいなくおほし」(八四才)たり大式のめのとくら人とか事は何」のかすともおほえず君の御ありさま思ひ」いつるに今もたえぬとみゆればのこりの」こともいひならさむれともかひなしさか」の院にもかくきかせたまひていと御心」あはたゝしくあさしくおほえたまふ」いかなることによりさしもめてたかりし」ありさまをそむきすてけんとははれかな」しくおほさるゝ中にもひめみや

の御」ことほ／＼なくてやみぬるそいとくちをし」(八四ウ)うおほえたまふみねには日数ふるにした」かひていとゝ御ころのうちににもこり」なくさみまさり給ひて花つみ水くみつ」かへたまふ様まことにむかしのしやか如來」もかくやとそ見えたまふこゝろでんのみ」やはかやうの事もひとへに我御身のゆと」のめいとゝ御身の程おほししられてむ」かしのありさまもつみあさからぬやうに」のみ見きゝたてまつるいかてほかなひて」院なとおなじさまにをこなひつゝきえ」(八五才)たまひにけん御ゆく事もとひたてまつり」まづらせんと人しれすおほされけるとそ」

・貼付されていない紙片の内容を以下に示す。

六八才 「きいかばかり」 才三行

七三才 「ていのかた」 才四行

・二ウ三行目の頭注に「しほみては入ぬる磯の」草なれやみらく」すくなくこふらくのお」ほき」とある。

〔付記〕

貴重な資料の翻刻をご許可くださった金沢大学附属図書館に御礼申し上げます。

なお、本稿は科学研究費助成金若手(B)『吾の衣』諸伝本の本文研究及び校本作成(課題番号16K16774)の成果によるものである。

(せきもと まさの・北海学園大学人文学部講師)